

コソダテノシンリ Vol.1

中谷陽輔

コソダテ ノ シンリ？

心理学を専攻していた学生時代、友人がよく「心理の真理は、心裏を審理することや！」と言葉遊びをしていました。本稿のタイトルがどの“シンリ”なのか…についてはさておき(その一文の意味が真実かどうかもさておき)とりあえずはその時々による、ということにしておきたいと思います。

そんな少し曖昧さのあるタイトルを冠して、対人援助学マガジンが記念すべき第50号の節目を迎えた後に、そっと新連載を始めたいと思います。

かたや”コソダテ”について、漢字変換をすると、「子育て」が真っ先に出てきます。一方、いつから誰からともなく、「孤育て」と示すこともでてきています。ということで、本連載のタイトルにある”コソダテ”については、子育て(孤育ても含む)ということで、曖昧さは比較的に少なそうです。

一人で子育てを行うということ

「ワンオペ育児」という言葉が『2017 年ユーキャン新語・流行語大賞』にノミネートされてから早 5 年が経過しました。2014 年、ある飲食チェーンで深夜労働をすべて一人で行う勤務、いわゆるワンオペレーション勤務が常態化していたことが報道され、「ワンオペ」が注目されました。そこから、親(多くの場合、母親)の片方一人で子育て負担を背負って行っている状態を「ワンオペ育児」というようになったようです。

個人的に、「ワンオペ育児」という言葉は、もう一方の親を批判するニュアンスが含まれているように感じられるため、あまり好きではありません。

「ワンオペ育児」という言葉が浸透するもう少し前から、核家族化や少子化が進む現代日本において、家族や親族の協力が得られず近所との付き合いも希薄な状態、いわば子育てが孤立化した状態が、「孤育て」と示され、問題視されてきました。

その状態自体は、親子それぞれにとって、できるだけ解消に向けて考え、手立てを講じていった方がいいと考えられます。

進化心理学的に、ヒトはそもそも、共同養育のスタイルで子育てをするようにできている、という言説があります。ヒト以外の霊長類では、他の個体が長期間にわたって子どもを育てるといって自体がほとんどなく、共同養育というのは、ヒト独自の進化の過程で獲得されてきたようです。ヒトの進化の歴史を読み解くまでもなく、大家族や地域に支えられながら子育てを行うということは、日本に限っても昭和時代ごろまでは、一般的な光景であったかと思います。

また神経心理学的にも、女性ホルモンの一つである「エストロゲン」は、女性が妊娠し出産まで増加するのに、出産後に急減し、その結果として女性(母親)は、母乳の分泌が可能となる一方、強い不安・孤独を感じやすくなることがわかっています。一見、赤ちゃんのいる母親が、ホルモンの影響とはいえ、精神的に不安定になるというのは、その赤ちゃんにとって生存の可能性が低くなるように感じられます。ただそういった母親のもとで育った子どもが、ヒトの進化の過程で生き残ってきたからこそ、そういったホルモンの働きもまた、残っているのです。

その事実への解釈の一つとして、出産直後の母親に代わって子どもを養育したり身の回りのことを行う人がいる環境、いわば、母親が孤立しなくてすむ、共同養育が可能な環境が、ヒトの生存に不可欠だった、ということが出来ます。

ある 40 代男性(以下 CI)の事例

ここまで、「コソダテノシンリ」というタイトルの説明を兼ねて、「孤育て」について、心理学的にも理にかなっていない根拠を示してきました。

そこで、ある一つの事例を紹介したいと思います。

- ・主訴:子育てに苦勞している人を見ると、感情が大きく揺れ動いてしまう。
そんな自分がどのように子育てに向き合うとよいか、話し合いたい。
- ・家族構成:4 人家族。妻(病院勤務の専門職・正社員)と共働き。未就学児が2人。
- ・CI の原家族:父は元・大手企業の技術者。母はパート。父母ともに同一の他県出身(車で片道 2~3 時間の距離)。CI は4人きょうだいの第2子。現在、父母・長子・CI は関西在住(それぞれ別世帯)、第 3・4 子は結婚してそれぞれ関東在住。
- ・成育歴・経過:X-40 年頃、関西で出生。CI が幼少期~思春期頃まで、父が他県へ単身赴任(車で片道 6~7 時間の距離)。その間、母は一人で家事・育児を担う。X-20 年頃、大学生となった CI は心理学を専攻し、家を出て一人暮らしを始める。大学院に進学後、臨床の仕事を非常勤で始め、X-10 年頃、研究の道から子ども福祉臨床の現場へ(現職)。妻とは非常勤先で出会って交際がスタートし、CI の就職を機に結婚。2人の子どもを授かり、CI は、それぞれの出生に合わせて育児休業を取得。

この CI は、幼少期から4人を「孤育て」する母のもとで育ちました。そして現在、仕事でもプライベートでも「子育て」と縁深い生活で、頭の中の大きな比重を占めているようです。主訴にあるように、どうやって“コソダテ”と向き合うかということ自体、CI の重要なテーマになっていそうですよね。

…そんな CI が私です。連載を通じて、自分なりの“コソダテノシンリ”と向き合っていきたいと思います。改めまして、宜しくお願いいたします。

【参考文献】

- ・ 浜屋祐子・中原淳（2017）.『育児は仕事の役に立つ:「ワンオペ育児」から「チーム育児」へ』. 光文社
- ・ 明和政子（2013）. 霊長類としてのヒトの子育てを考える 日本心理学会(編) 心理学ワールド第 62 号(特集 みんなで子育て 心理学からの提言)日本心理学会, pp.9-12.
- ・ NHK（2016）. NHK スペシャル『ママたちが非常事態!?:最新科学で迫るニッポンの子育て』 <<https://www.nhk.or.jp/special/mama/archive1.html>> (最終閲覧日 2022 年 11 月 22 日)

<プロフィール>

児童福祉施設の相談員。資格は、公認心理師、社会福祉士、臨床発達心理士など。
大学院に進学後、研究者の道から方針転換して子ども福祉臨床の現場に飛び込み、早 10 年強。現在、仕事でもプライベートでも、子育てまみれの日々を送っている。
プライベートでの子育てやらをめぐる由無し事を、ブログに月数回、不定期投稿中。
(<https://childcare-support.hatenablog.jp/>)